【翻刻】『類題稲葉集』夏部

**渡邊　健

概　要

前稿（「【翻刻】『類題稲葉集』序・春部」『米子工業高等専門学校研究報告』第五六号、令和三年三月）に引き続き、『類題稲葉集』夏部二六三首を翻刻・紹介する。本書には近世の鳥取の歌人の和歌が広く収められており、幕末の鳥取における地方歌壇の活動を知る上で有益な資料である。

凡例

一　底本には、米子市立図書館所蔵『稲葉和歌集』上巻（整理番号　Ｙ９１・Ｉ２７・１）を用いた。

二　翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

1　歌頭に算用数字で和歌の通し番号を付した。

2　読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した（例　原文「立そむる」→翻刻本文「立ちそむる」）。

3　仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「（ママ）」と傍記した。

4　漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。

5　読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（　）を付し、平仮名で読みを施した。

6　繰り返し記号「〻」「〳〵」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「〳〵」で表記した。

7　合字「ゟ」「ゑ」は、それぞれ「こと」「より」に改めた。

8　翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。序文や詞書等の文章には句読点を付し、改行は私意で改めた。

9　不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。底本の誤脱と思われる箇所については、稿末の【翻刻付記】に私見による改訂案をまとめて記している。

10　丁付は、各丁片面の終わりに　」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。

三　本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻の掲載をご許可いただいた米子市立図書館に深謝申し上げます。

なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号20K00359代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二一年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

【翻刻　『類題稲葉集』】夏部

夏部

首夏

561 神山にしめうちはへて祝子が賢木とるべき夏はきにけり　貞宣

562 夏衣おもからぬ身の中〳〵にすみよしといふ時は来にけり　安歆

563 春日野やまだ夏浅し若くさに春もこもりて雉子なくなり　治堅

564 木がくれのふる井の水にちる花を絶ゞみしもきのふ也けり　年平

565 小山田の麦のほだちの打ち戦（そよ）ぎいたらぬ夏もなく成りにけり　貞之

首夏朝

566 薄衣まだ身にそはぬ袖の上にきりの花ちる朝ぼらけかな　政兼

首夏月

567 山のはに一むら残る薄がすみ消えて時しるゆふ月のかげ　清彦

首夏雨

568 若竹にたまらぬ雨の雫より風見えそめて夏はきにけり　周道

首夏水

569 けふみればいかだにかゝる花もなし六田のわたり蔭ふかめつゝ　秀実

570 ちる花を流しつくして山水の音なつかしくなれる頃かな　衡

」（二八オ）

首夏風

571 なら柴のうら葉かへして吹く風のそよなつかしき夏はきにけり　加藤是満

社頭首夏

572 神祭る宇倍のみ山の花うつぎぬさと咲きちる月立ちにけり　定庸

山家首夏

573 山ざとは軒ばにかゝる藤浪の春のさかりに夏たちにけり　治堅

更衣

574 花にそめこ蝶になれし白妙の袖の春にも別れぬるかな　秀実

575 ならの葉の朝風しみて心さへ猶身にそはぬ夏衣かな　知足

576 みし花のなごりうすれて単衣身にあふけさと成りにけるかな　将貫

577 かぎり有りて衣は夏にかへしうく袂はなれぬ花ごゝろかな　盛平

残花

578 郭公なく一声を待ちつけし山ぢの花はこゝろ有りけり　周道

579 夏きぬと人はいへどもさくら花匂ふかぎりはあらじとぞ思ふ　恒安

580 時しらぬ雪とも見えて夏山の木の間よりちる山ざくらかな　俊徳

581 瑞枝さすは山を分けてけふ来れば桜かざせる人も有りけり　清村

」（二八ウ）

山家残花

582 花ざくらいまだ残れるわが庵は嵐もしらぬ山陰にして　清彦

卯月初めつかたある夕

583 玉だれのをすもゆらゝに吹く風のはしゐたのしく夜は成りにけり　俊民

おなじ頃ものへ行くとて

584 時鳥初音きかんの明けぼのを春にかへしてひばりなく也　周道

新樹

585 花をのみ思ひし窓の梅さくら若ばにみちて夏は来にけり　政兼

586 ふくかぜに袂まかせて見るべきは花より後のわかば也けり　晋

587 わが園の一木ふた木の植かづらかげのゆかしく成りまさるかな　光郷

水郷新樹

588 我がやどの庭の木むらに梟の昼もなくまでしげる頃かな　秀実

589 夏かげの木の下がくれ行く水の音のみ多し川づらの里　龍臣

山新樹

590 杉むらの絶えまにみえし峯ごしの谷も埋もれてしげる頃かな　孤峯

」（二九才）

新樹妨月

591 月影のさすとはすれど夏木立しげきが中はをぐらかりけり　読人しらず

592 花ちりて月にもうとく成りにけり水枝さしそふ山陰の庵　弘範

新竹

593 笛にもと思ふ園生の若竹に声なつかしき夕かぜぞ吹く　治堅

卯花

594 くれていにし春を隣にへだてゝぞ垣の卯木は咲き初めにける　理世明

595 卯木さく里のまがきは白妙の衣ほしたる山にぞ有りける　琴子

596 きのふけふ咲くや籬のうの花に木のくれ暗（やみ）もかつしらみつゝ　貞宣

597 村雨のはるゝ朝の中垣にかゝれる雪や庭のうの花　知雄

598 うとましき庭の垣ねも卯花の咲けばさながら親しまれつゝ　松田知恵子

月前卯花

599 久かたの桂の里の花うつぎ咲きちるかげも月に見えつゝ　信庸

600 卯花の雪にしらみて賤がやのかきねはなるゝ在明の月　俊民

卯花似月

601 月かげに咲きまがへたる卯花はこのくれやみの光なりけり　安歆

」（二九ウ）

卯花似雪

602 咲きつゞく卯花垣の薄月夜雪のかげふむ人も有りけり　貞喜

603 うの花の雪の中道いつしかとさやかに成りて日はくれにけり　積

行路卯花

604 卯木もてふける仏の庵こそ雪のみ山の姿なるらめ　晋

灌仏

605 みはかしのつるぎの太刀のもろは草雄々しき神の心とるらし　安歆

606 宮人のけふにあふひの諸かづら長き世かけしかざし也けり　有恒

葵

607 ながめやる心に声を残し置きて行くへもしらぬ時鳥かな　直規

608 夢さめてしばしねぬよの時鳥なく二声もさやかにぞ聞く　重尚

609 かの山とおもひさだめて立ちよれば嶺ごしになくほとゝぎす哉

郭公

610 足引の山ほとゝぎす都には鄙びたる音ときく人もなし　鳳鳴

611 みじか夜の夢路ながらの時鳥なくとはすれど聞きもらしつゝ　安歆

612 むら雨の雲の迷ひに鳴きすてゝ声もほどなき時鳥かな　周道

」（三十才）

613 とふ人も花をかぎりのみよし野に物うとげなる時鳥かな　久鎮

614 ほとゝぎすたゞ一声に有明の月もいくよか待ち出でにけん　豊成

615 時鳥たゞひと声のなごりより心にかゝる嶺の雨雲　政兼

待郭公

616 月きよし卯花さけり時鳥またれて鳴くもをりにこそよれ　義孝

617 ほとゝぎすつれなき月を待ち出でて去年もかくこそ起き明かしつれ　安歆

富子

618 鳴かずしもあらぬ物から時鳥わが待つ空はつれなかりけり　英光

619 ほとゝぎすかくてぞ夜も明けぬべしまつにのぼりぬ有明の月　淇園

620 恋すてふなき名やたゝん郭公待つよあまたに起きあかしつゝ　友愛

621 月きよしひさしの蔀うちあげてこよひもまたん山ほとゝぎす　周道
622 心あての松見え初めて時鳥なほ山ふかきしのゝめの空　俊彦
623 立花の匂ふよ頃のほとゝぎす月はつれなきたぐひともなし　政芳
」（三十ウ）
624 時鳥いつをまてとかしのぶらんたのめし雨は月に成りしを　茂信
625 さばかりはしのびもはてじ時鳥一声いかに村雨の空　正方
依雨待郭公
626 むら雨のふるの神杉こゝをせにまてどつれなし山時鳥　長秋
627 村雨の卯花くたす夕まぐれさてもつれなき時鳥かな　弘範
人伝郭公
628 人伝に聞きつときけば足引の山郭公山は出でにけん　豊秋
629 ほとゝぎす待つにたのみはそはれども人伝のみはかひなかりけり　いく子
待人聞郭公
630 人またん里をばかれず時鳥とふべかりとやをちかへりなく　治堅
郭公一声
631 山彦のこたへだにせよ時鳥それかとたどるよはの一声　井尻こん女
初聞郭公
632 今よりは夜がれなおきそ郭公待ちしよりけにうさもこそゝへ　安歆
633 此の日頃山にはなきし時鳥こよひや里の初音なるらん　千恵子
郭公頻
634 一声も人はまれなる山陰にあまたも名のる時鳥かな　貞喜
」（三十一オ）
635 夏山の木のくれやみに打ち羽ぶきなく音もしげき時鳥かな　季甫
暁時鳥
636 待つよひの空にはなかで郭公たがきぬ〳〵のひつをかるらん　安歆
朝時鳥
637 杉むらのうへ行く今朝の風雲に一声なびく時鳥かな　茂之
夕時鳥
638 夕やみの雲路をたどる郭公なく一声に月もいでなん　長秋
639 ゆふ雲の絶えまに月はほのめきぬ今か出づらん山ほとゝぎす　秀隆
雲外時鳥
640 なつかしときく一声もほとゝぎす高嶺の雲のよそに鳴くなり　俊民
月前時鳥
641 郭公しのびあへずやもらすらん月も雲まの明けがたの空　純徳
642 ほとゝぎす雲がくれ行く声す也暁月夜雨になるらし　村瀬鎮喜
643 ほとゝぎす雲ゐのよその一声にね覚めてみれば月更けにけり　喜蔭
雨後時鳥
644 村雨のなごりたゞよふ雲まより鳴く音こぼるゝ時鳥かな　守雄
645 雨はれて青葉さしそふ山窓になく音かたよる時鳥かな　秀実
」（三十一ウ）
山時鳥
646 郭公待つ夜むなしく明けにけりかつらぎ山の杉のむら立ち　重世
岡時鳥
647 かたらひの岡のあたりを過ぎがてにしのび音もらす時鳥かな　村岡
杜時鳥
648 足引の山ほとゝぎす山を出でて野中の森のちえに鳴くなり　豊秋
海辺時鳥
649 松しまや月の出しほのいさよひにをちかへりなく時鳥かな　宜徳
行路時鳥
650 をちかへりまたも声して郭公えぞ過ぎやらぬ杉のした道　英光
関路時鳥

651 逢坂の関の杉むら過ぎがてに行きかへりなく時鳥かな　有信

山家時鳥

652 夏山のよそにのみして鳴くものと思ひし鳥は吾が友ぞかし　年平

653 此のまゝにすみやはてまし山里は山ほとゝぎすこゝらなく也　洪園

654 わが山の松をはなるゝ朝雲におくれてもなく郭公かな　英光

旅宿時鳥

655 都思ふ夢とうつゝの中山をさよにも過ぐるほとゝぎす哉　英庸

名所時鳥

656 よしの山花はあとなき村雲に物おもはする時鳥かな

」（三十二オ）

時鳥聞両方

657 もろともに思ひとけてや時鳥山より野より鳴きかはすらん　洪園

時鳥入雲

658 山のはの梢よこぎる村雨の雲に声する時鳥かな　俊彦

時鳥入琴

659 かきならす我妻琴のしのびねに忍び音たぐふ時鳥かな　豊秋

卯月ばかり月のあかゝりけるに

660 ほとゝぎす待つとせしまに更けぬらし若葉の露の月ぞしらめる

弘範

老いのゝち思ひいづること有りて

661 夜をこめて淀のわたりの時鳥きゝしうつゝは夢とこそなれ

五月五日ほとゝぎすを聞きて

662 あやめふく五月のけふの時鳥心ひかるゝねにも有るかな　のぶ子

早苗

663 ひと村のみどりと見えし若苗も五百代をだになびく頃かな　廣滋

664 さみだれに民の心も行く水のあまりあるまで取るさなへかな　三蔭

」（三十二ウ）

665 御民らがこれも貢ぎの玉ならしをだの若苗露のぼる也　飯田汐子

666 うゑはてし門田の早苗うち靡きふく風見えてよは明けにけり　秀保

卯月ばかりものへ行く道にて

667 五百代の田面の麦のあから穂にうからぬ秋の風わたる也　治堅

おなじ頃気多郡に物しけるに

668 早苗とる田づらの夕日影落ちて若葉にしづむ鷲の山風　茂信

おなじ頃大谷季甫がもとにて夜更くるまでかたりて

669 ふりし世をかたらひをれば時鳥待つとせぬ夜もやゝ更けにけり

重稔

牡丹

670 世にとめる色にはさけど浮雲の散り安からぬふかみ草かな　治堅

671 見るからに心の色の深み草八重九重に咲きまさりつゝ　保重

672 手弱女の手折るたもとに露みえて花重げなる深み草かな　惟成

」（三十三オ）

競馬

673 乗る人の心の駒を静めずはあら手づかひの先はかけめや　久鎮

橘

674 かげふめば街（ちまた）の塵ぞかをるなるあから橘花咲きぬらし　知足

675 我が袖もわが袖ならず立花のかをるや風の心なるらん　知運

楝

676 夕立のなごり波よる楝原月もゆかりの色うつすなり　小林大茂

百合

677 犀川の山ゆり咲けりあすもかも花ゑみなして神祭るらし　廣滋

夏菊

678 照る日にもわたやきせまし夏菊の露なつかしく花咲きにけり

679 五月雨　ちせ子
ほとゝぎす初音きゝつる朝より降り出でし雨のはるゝまぞなき　治堅

680
難波がた入江の芦のふしのまも晴れがてにのみさみだるゝ哉　賤子

681
晴れぬべき空を待つまの五月雨に月のよ頃はいつ過ぎにけん　千恵子

682
山柿の花のみ散りてかた庵の苔路とゞろにさみだれぞ降る　周道

683
さみだれはけふも晴れぬか家鳩の塒にこもる声ばかりして　茂信
」（三十三ウ）

684
雪の色ににほひし垣の卯花も片くづれして五月雨ぞふる　三好秀年

山家五月雨

685
山ふかみけふも晴れせぬさみだれに雲の底行く水の音かな　清見

瀧五月雨

686
音なしの滝もとゞろに成りにけりはれま稀なるさみだれの頃　武成

ある夜

687
さみだれの雲間もとめて露ばかり光をこぼす月も有りけり　貞喜

五月雨久

688
生ひそむるふるやの軒のかべ草に長き五月の雨をしるかな　年平

689
若竹は妻やの軒を過ぐれどもはれんともせぬさみだれの空　穣

690
有明も雲たちこめてみな月の月たつ日まではれぬ雨哉　豊秋

五月雨晴

691
大舟のいづるかた帆に山見えて五月雨はるゝ風わたる也　英光

梅雨

692
けふもまた梢のかはづ声立てて色づく梅に雨そゝぐなり　守前

五月ばかりものへ行くとて

693
あやめふくわらやもみえて若竹の雫さゆがに五月雨ぞふる　鳳鳴
」（三十四オ）

水鶏

694
槙のとを空にもたゝく水鶏かな月に明けたる宵としらずや　豊秋

695
いさらゐの音きくばかりさよふけてかたもまぎれず鳴く水鶏かな　治堅

696
真菰草そよぐともなき濁り江に月影更けてくゐななく也　秀実

夏月

697
若竹の葉分けのかぜの露のまにかたぶき安き短夜の月　祐之

698
夕立の雨にくれつる我が園のまつより月は見え初めにけり　俊彦

699
我が門の竹垣つたひ行く水に月せき入れて夕すゞみせん　周道

700
はしゐしてならす扇のうつしゐも月に見るまで夜は成りにけり　信庸

夏月明易

701
待ちいでしけしきながらの朝ぼらけみじかき夜とも月はしらずや　宏年

702
まだ宵の面影ながら明けにけり月影うすきうたゝねの窓　秀隆

雨後夏月

703
夕立は軒ばの松にはれ初めて音せぬ月ぞ更にすゞしき　賤子

704
さみだれの日数ふるやの板びさしひまありけらし月のもりくる　晋
」（三十四ウ）

川夏月

705
すゞしくも月の影ふむまさご川かは上わたる人も見えけり　政芳

山家夏月

706 山里の柴のあみ戸はさすまなくとく明けわたる夏の夜の月　有信

夏の歌の中に

707 かぜそよぐ園生の竹のひまとめて遣水したふ月も有りけり　正路

708 河骨の花さく小川水きよし橋はあれどもかちわたりせん　英光

瞿麦

709 妹が門ぬれて出でこし朝露に見るもまばゆき床夏の花

710 有明の月も宿かる小垣内に露の玉しくとこなつの花　貞宣

合歓木

711 さよ更くるね覚めの窓のしるべねぶ月にねぶりて花咲きにけり　保合

夏草

712 浅ぢふのをのゝ篠原夏たけて置きこそあまれ夕ぐれの露　年平

713 きのふかも雪かき分けて初わかなつみし沢辺は草がくれつゝ　米原豊廣

714 苔清水くむ人絶えぬほどみえて分けしまゝなり野ぢの夏草　知良

715 しをりせぬ道はゆきても絶えぬらししげるまゝなるのべの夏草　千恵子

」（三十五才）

716 かきくもる折しも風にまねく也よられし草の雨や待つらん　橋尾保昌

717 結びみん野中のし水いづこともわかぬ斗に草ぞしげれる　治久

鵜川

718 五月闇空も鵜の羽のくらきせをよそにてらしてかゞりさす也　久鎮

719 うかひ舟さすや川せの篝火に五月の空は消えはてにけり　嘉則

蛍

720 水草の清き汀にむつれつゝおもひにもゆる虫や何なり　祐之

721 かげくらきうら若竹の葉ごもりに行く水見えて蛍飛ぶなり　治堅

722 くれなゐの花摘む子らがかへるさの袖にみだれてとぶ蛍かな　惟成

723 夏かげのひまもる星と見るがうちに梢はなれてとぶ蛍かな

本性院奥道

724 山水の音も聞こえて川ごしの千町田ひろく蛍とぶなり　龍臣

725 あはれ也何をねざしに浮草の乱れてもゆる蛍なるらん　宜徳

726 山沢のあやめもわかぬ夕雲をほのに照らして行く蛍かな　清彦

」（三十五ウ）

727 風わたる外面の麦の穂末より露をはなれてとぶ蛍かな　潮

728 川たけの起きふすかげもあかぬまに夕月きえて蛍とぶ也　古蔭

野外蛍

729 とぶ蛍しのぶ思ひもあらはれて風に乱るゝをのゝしの原　三蔭

田上蛍

730 垣内田のみじかき苗に咲く花は小雨にもゆる蛍也けり　俊彦

川蛍

731 草がくれ流るゝ水のひとすぢに行くへもとめて飛ぶほたるかな　古樹

池蛍

732 池水の玉藻のうへにあらはれて光をみがく夏虫の影　久鎮

井蛍

733 くむ人も絶えてなげなる山里の古井になれて飛ぶ蛍かな　豊廣

水辺蛍

734 玉ひかる瀧のしら波音くれて岩渕つたひほたる飛ぶなり　茂信

735 口なしの花の垣内の池水になかぬ蛍ももえわたりつゝ　知運

736 うきにはふ芦の下根の音には立てずよたゞ蛍のもえわたる哉　衡

船中蛍

737 いなば川月待つ袖に打ちはらふを舟の塵は蛍なりけり　潮
」（三十六オ）

樹陰蛍

738 夏むしの光にてらす川ぞひの柳が陰ぞ闇としもなし　宜徳

739 みどりそふ庭の木の間をもる星の影かと見えて蛍とぶ也　豊秋

林間蛍

740 露ばかりかげをこぼして小林のしげきがもとを飛ぶ蛍かな　宣甫

窓前蛍

741 おこたりの草以て窓の夕やみをおどろかしてもとぶ蛍かな　有恒

簾前蛍

742 わた殿の下行く水の音くれていよすきらめき蛍とぶ也　秀保

夕顔

743 むらさきもあけもあやしき黄昏にまがふ色なき夕貌の花

女〔小谷豊章妻〕

744 塵ひぢの中に生ひたる夕顔の籬も山としげりあひつゝ　廣滋

745 をすのとに三日月見えて夕がほの紐とく宿をとふ人や誰　守前

746 誰がぬれし一むら雨の跡ならん入日露けき夕顔の花　積

蚊遣火

747 月影にしばしかゝれる薄煙いづこの里のかやりなるらん　読人不知

748 木立のみしげるとみえし山陰の里はかやりに顕はれにけり　宣甫
」（三十六ウ）

749 かやり火はけしきばかりに焚きさして楢のそよぎに月をこそまて　政芳

750 たゞ人の心みじかきほどならし蚊遣の烟と絶えのみして　英光

751 雪にだにみえつる松をかやり火の烟にかくす山本の里　定庸

752 かやりたく遠の里わの夕風に松原つたふ薄煙かな　重朋

蓮

753 池の面は水さへ見えず成りにけり生ふる蓮の広葉のみして　季尚

754 蓮葉は露もしらじを玉とのみめづるや人の心なるらん　妙光寺本龍

755 かたよればやがてこぼるゝ蓮葉の露のうへにもおく心かな　古樹

756 かぜふけば池のおもてに白玉をくだきて落とす蓮ばの露　安藤良任

757 生ひしげる池のぬなわ（マヽ）のうきにさへまじりて清き玉蓮かな　琴子

采蓮

758 しるや君蓮の露の玉くしげ二もとかけて折りし心を　大茂

氷室

759 大君にさゝげし跡の氷室守打ちとけてこそ涼しかるらめ　賤子
」（三十七オ）

760 けふをのみ松が崎なる氷室守み雪に出でて夏は知るらん　季尚

761 松が崎千代の雫の結べばや夏さへ解けぬ氷なるらん　宣甫

762 神ませばもるひとなしに大山の氷は夏も消えせざりけり　貫一

夕立

763 高千穂の嶺うちくもり待ちこひし玉もたはゝに夕立ぞ降る　安歆

764 夕立の雲のかげさす窓の外を照らしながらに過ぐる雨かな　宣甫

765 うちむれしうなゐが友の竹馬も乗りはなち行く夕立の空　英光

766 はたゝ神音もとゞろに光る日のかげにしづるゝ夕だちの雨　保合

767 くもるかとみるまに近くなる神のかた山過ぐる夕立の雨　貞喜

768 鷲が峯に翅ばかりと見し雲の千里に落ちし夕立ぞふる　俊彦

夕立雲

769 山の端に立ちまふ雲のふるまひもみえてすゞしき夕立の空　武義

夕立晴

770 晴れにけり池の蓮の露のうへに月を残せる夕立の雨　政兼
」（三十七ウ）

771 山夕立
我妹子が黒髪山は真櫛もてゆふ立すらし雲ぞみだるゝ　俊民

772 野夕立
夕立の露のみだれにかぜこえて鶉なくべく野は成りにけり　重礼

773 市夕立
市人のかたまにつみし撫子の花さへきほふ夕立の空　宜徳

774 田夕立
見るがうちには山しげ山ゆふだちて門田をわたる風きほふ也　政英

775 海辺夕立
沖遠くはやちにさわぐ浪みえて島やまつたふ夕立の雲　重尚

776 蝉
梢ふくかぜも落ちくる山陰に夕ぐれ高きせみのこゑかな

777 たのみなき秋のしぐれの声をのみ何にまねびて蝉の鳴くらん　茂之

778 空の色のみどりにしげる杉むらも時雨ひまなき蝉の声かな　俊民

779 扇
かやりたく窓の煙に打ちならすあふぎの風の行くへをぞみる　喜蔭

780 とりかへししるしならねどすゞしさの扇は閨に親しまれつゝ　しま子

781 時となくあふげば風の露くれと夏のものとはならしてぞしる　真琴
」（三十八オ）

782 泉
岩が根の清水がもとに庵しめし我が山陰は夏なかりけり　武成

783 いつ樫の冬の落葉をかき分けて結べば寒き苔清水かな　嘉則

784 をぐら山夜ごえにくれば六月の命なりけり松の下水　洪園

785 真し水に我がもとゆひの霜みれば夏も身にしむ松の下風　守前

786 瓢もてくむほどもなきいさら水それさへたのむ六月の空　信庸

787 納涼
水鶏なく夕川かぜを身にしめて月の行くへに船はまかせん　貞之

788 川波に夕日ながれて涼しさは柳がもとにかたよりにけり　知足

789 短夜のふしどの月に風見えて明くるもをしき窓のくれ竹　嘉則

790 わが園の椎の葉しのぎもるみれば月も涼しきかげもとむらん　知足

791 河辺納涼
夕すゞみいつとはあれどみよしのゝ夏みの川は山陰にして　廣滋

792 風そよぐ楢のを川のさゝら波よるひるとなく涼しかりけり　しま子
」（三十八ウ）

793 舟中納涼
せを浅みさゞれにあたる川舟の底のひゞきも涼しかりけり　喜蔭

794 松高風有一声秋といふことを
松かぜの一むら高き音すなり雲井は秋にいつ成りにけむ　治堅

795 夏朝
夏むしの影ぞ消え行く麦畑に露みえ初めて夜は明けにけり　年平

796 しらかしの古葉こぼるゝ朝風に消ゆるもすゞし赤星の影　宣甫

797 夏夜
夏むしのけちなんとする煙火のまたゝくひまによはしらみけり　里余子

798 ほとゝぎす待つ夜も更けて卯花の垣ねは暗（やみ）にいつ成りにけん　義孝

799 そことなきすゞろ歩行（ありき）に月更けて夏野の露の乱れをぞみる　古蔭

800 夏風
波のうへにたゆたふ月の涼しさも空ふく風の心なりけり　周道

801 すゞしさを残して過ぐる夕立の雫ながらに松風ぞ吹く　孝敬

802 夏木
照らす日の影によられて糸柳寄りひくばかり吹くかぜもなし　幸英

803 我妹子がきのふか縫ひし紅の赤裳にゝたる花ざくろかな　保合

804 すがるなくをのゝ山柿いつしかと若葉がくれに花咲きにけり　周道

805 雨はれて色こそにほへ片岡のをざゝにまじる昼がほの花　宜徳

夏居所

806 蓮葉の露のみ玉ともてはやしけふも暮らしつわた殿にして　惟成

807 けふこそあれ明日はかなしく成りやせん瀧を隣の松の下庵　英光

夏山居

808 夏衣きてはとへかし都人まつらん鳥もこゝらなくなり

809 花にだにとはれざりつる山住みもたつるかやりは世にしられつゝ　本龍

810 岩そゝぐ泉づたひに吹く風をたもとにしむる松の下庵　貞宣

夏池

811 池の面に枝さす柳うち払ひ月とゝもにぞ夏はすまゝし　孝孜

夏衣

812 夏はたゞ月待ちいでゝおばしまによるの袖こそ身にはそひけれ　川崎政子

夏天象

813 神世よりうつるとはなき大空も夏はみどりの色まさりつゝ　仲子

」（三十九ウ）

814 はりまの旅のやどりに在りける夏

何ばかり物思ふ身とはなけれども水鶏なくよはねられざりけり　廣滋

六月ばかりものよりかへるさ

815 くゐ（ママ）なゝく野沢のそひの放れ庵松を隣にかやりたく也　賤

」（三十九オ）

子

816 夜や更けぬ秋やかよへる転寝の妻やの竹もそゝとなるなり　縁

晩夏

817 若竹もふりぬる夏といつ成りてみざりし露に風わたるらん　惟成

818 水そゝぐ夕かげ草の露のまに暮れても行くか夏の日かげの　秀保

晩夏虫

819 秋かぜのほのめくくれに夏むしのひとりさびしく行きかへりつゝ　宜徳

夏神楽

820 笛竹に梢のせみも声そへて夕ぐれきほふ夏神楽かな　季尚

祓

821 明日といへば秋にこすわの御祓川かは風涼しよや更けぬらん　正甫

822 罪とがも流し尽くしてみそぎ川かへらぬ夏と秋風ぞ吹く　周道

」（四十オ）

夏の夜の■■■を

823 夏の日を月にわするゝ柴の戸はとざしもやらで明けぬよぞなき　穣

【翻刻付記】

743歌　底本では作者表記は「女」に傍記して「小谷豊章妻」とする。

＊原稿受理　令和四年一月十五日

＊＊教養教育部門